

補足 3

再び『日本国語大辞典』によれば、万葉集卷一〇・二一七七に「春は萌え夏は緑に紅の緑色（まだら）に見ゆる秋の山かもく作者未詳」とある。

1993.2.20.

「京大教養部報」No. 149 1985年9月25日。

ことばの周辺

— 先入観ということ —

コロンプスの卵ということがある。無意識に或る前提を受け入れてしまって疑わないことが、事物をありのままに見る妨げとなる、という例である。学問に志す者は特に、先入観に惑わされてはならぬとは、よく言われる事であるが、たとえばそのように心掛けてはいても、これは実際にはさほど容易なことではない。音のように一見極めて分명한客観的実在と思われているものについてすら、然りである。

たとえば「パパ」というとき、初めのパの音と後のパの音が全く同じであることを、我々は疑っていない。しかし日本人は語頭では[p^ha]、語中では[pa]と発音するのが常であって、語頭で[pa]と発音する為には、かなりの習練を要する。両者を仮に入れ替えても、意味には何等の変更もないのであって、[p^h]と[p]の相違は、その客観的実在にも拘らず意識されることがない。他方[p]乃至[p^h]と[b]とは極めて明確に区別される。両者の入替えが語義の変更を伴うからである。

朝鮮語の場合はこれと全く異なる。[p^h]と[p]とが、日本語の[p]と[b]のように明確に異なる音として意識されるのに対し、[p]と[b]は同じ音として等しく ㅍ によって表記され、これを相互に識別することは困難である。ㅍ が語頭においては自動的に[p]として、語中においては[b]として実現されるからである。従って朝

鮮語においては、[geta]のような音を持つ語は、自然には存在しない。曾て関東大震災の折り、流言に惑わされた暴徒が「不逞朝鮮人」を襲ってこれを虐殺するという不幸な歴史があったが、この時「朝鮮人」を識別する為に「五銭」と言わしめたという。[k]と[g]の相違が命に関わることもあったという、これは恐ろしい例である。

音声に関してすらこのようであるとすれば、意味の関与の度合がこれよりも大きい他の言語現象に関する客観的認識なるものの不確かさは、殆んど疑う余地がない。

以前にも書いたことがあるが、「高い」及び「低い」の反対概念は、夫々「深い」と「浅い」でなければならないにも拘わらず、何故か我々は「高い」、「深い」の反対語を「低い」及び「浅い」と考えている。このような思い込みを正すのは簡単なことのようにであるが、実は必しもそうではない。異なる構造を持つ言語の事実との対比を通じて、はじめて到達されるものなのである。

たとえばラテン語で「高い」を意味する *altus* は *altum mare* 「深い（中性）・海」にみられるように、「深い」という意味を併せ持っていた。ここでは上向きと下向きという相反するベクトルは中和され、専らスカラーのみが問題とされている。更にアフリカのスワヒリ語では、例えば *ki-sima ki-refu* 「深い井戸」、*m-lima m-refu* 「高い山」の外、*m-kono m-refu* 「長い手」のように、*-refu* は水平方向のベクトルをも中和している。このような例の存在は、「深い」の反対概念が「高い」でなければならぬことを示すと同時に、距離と方向は常に一体のものとして表示されねばならぬという考えが、決して普遍妥当なものでないことをも、教えている。

また我々は英文法において自動詞と他動詞の区別を学ぶ。他動詞とは他のものの上に及ぶ行為を示すものであり、行為が及ぶ対象は目的語によって表わされる筈である。確かに例えば *Jack kisses Jill.* の場合には、この関係は成立するように見える。しかし、*Jack loves Jill.* のような場合はどうであろうか。直接かつ具体的な愛もあろうが、より一般的には *Jill* の姿態、举止に眩惑されて *Jack* が特殊な精神状態に陥る、というのが事の真相に近いと思われる。してみれば *Jack*

は決して「行為主体」などではなく、却って憐れな被害者であるという考えも成立つ。また Jack sees Jill. の場合にも、明らかに Jack の行為が Jill に及ぶことはない。

目的語にはこの外「結果の意義」をあらわすとされるものがある。例えば「着物を縫う」、「手紙を書く」の類である。この場合着物あるいは手紙なるものは、「縫う」及び「書く」という行為の及ぶ対象ではなく、行為の結果に外ならないのである。

このように現実の事態としては全く異なるものが、等しく S—V—O の構文によって表現され、逆にこの構文を持つことによって、現実の事態もまた等質であるかのような錯覚に人を陥れることになる。

このようなことが生じるのは、他動詞の定義の仕方にそもそもの問題があり、これを正すことによって問題は解決できる筈だ、と当初は考えていた。しかし近年類型学的研究の著しい進展によって、自動詞の主語に立つ語と他動詞の目的語に立つ語とが、文法的に同一の形式を持つ言語が、意外に広く分布していることが知られるようになった。

例えばカムチャツカ半島の北に分布するチュクチ語では、kljavol čějvyrkun 「人が歩く」、koran'y čějvirkun 「鹿が歩く」に対して「人が鹿を殺した」は kljavolja koran'y nymyrknen となる。イベリア・コーカサス諸語に属するダルギン語でも、夫々 adamüili v-aša-r, vartkel b-aša-r に対して「人が鹿を殺した」は adamüij vartkel xa-b-uši-d. となる。

ここで他動詞の主語 kljavolja, adamüij は、自動詞の主語と異なる能格 ergative case に立っている。

このような現象についてさまざまな論議が行われる中で、これを持つ言語には「死ぬ」と「殺す」、「行く」と「運ぶ」のように自動詞と他動詞が同一の語によって表わされる場合が屢々認められること、動詞が目的語と文法的な一致を行う、いわゆる対象活用が広くみられること等が判って来た。例えばイラン諸語に属するプシトの言語では kitāb mi lwast 「本（男性）を・私は・読んだ（男性）」に対して titāi mi lwast-ala 「ノート（女性）を・私は・読んだ（女性）」が対立する。

これらの事実を合理的に説明する為には、この種の言語においては、他動詞の場合動詞は主語よりも目的語と強く結びつくこと、自動詞と他動詞の区別が文法範疇としては存在していないこと、を認めることが必要となる。自動・他動の区別が決して言語一般に通ずる普遍的なものではないと結論せざるを得ないのである。そうすればこれらの言語が能動と受動の区別を知らないことも、よく理解できる。

たとえばラテン語の *filium amō* 「息子を・私は愛する」のように、印欧語では一般に動詞は主語と文法的一致を行い、これとの結合が緊密である。しかし例えば「人が鹿を殺す」場合、「殺す」行為は客観的にはそれ自身で存在している訳ではない。「殺す」が「打つ」、「傷つける」等と異なるのは、偏に鹿が「死ぬ」という点においてなのである。そうとすれば、他動詞は目的語と強く結びつくのがより自然であり、より感覚的であるといえよう。

もしそうとすれば、これまで我々が自然であると考えていた主語と動詞の緊密な結びつきは、実は単なる先入観の結果に過ぎぬことになる。先入観を排するというのは、言うべくして誠に難しいことなのである。

やまぐち いわお ロシア語

「京大教養部報」No. 162 1987年4月1日。

出会いとふれあいと — 宿泊研修のすすめ —

よく知られているようでその割に案外知られていないと思われるものに、教養部の「宿泊研修」制度があります。なぜそう思うかと言えば、毎年募集していても、必ずしも多数の応募があるとは限らないからです。その癖多くの場合定員にはちゃんと足りているというのも変なはなしですが、それは一度参加してみると